

風の輪

障がい児保育は保育の原点

(社福)水仙福祉会 常務理事

風の子ベビーホーム園長

松村 昌子

障がい児保育から見たこと

私たちが風の子保育園で障がい児保育を始めたのは、昭和44年ごろのこと、障がい児を預かるところが殆どない時代でした。実際に受け入れてみると、多くの子どもたちは集団に入るところか、ことばが出ず、こだわりや常同行動など、関わることの非常に難

しい子どもでした。

どうしてこんな行動をする

のか、どうしたらことばが出てくるのか。毎日、朝から夕方までつき合い、行動の意味を考えたり、視線を追ったりしながら、真剣に取り組みました。そうして、半年、1年が経つうちに、ことばが少しずつ出てきて、周りの子どもたちの遊びにも興味を持ち始め、人といふことを喜ぶようになってきました。大人との信頼関係ができるとこんなにも変化することを学びました。この時の感動は、忘れることができせん。

保育方針の180度転換

ところが、私が障がい児と遊んでいる姿を見て、「ええわあ、あの子ばかり」と怒る子どもがいました。障がい児にはいてねいに関わる一方で、健常児の保育は年齢別の

一斉保育になっていました。

障がいのあるなしに関係なく、自分の思いをちゃんと受け止めてほしいのはどの子どもでもあります。同じ月齢でも発達には違いがあるのに同じ基準で子どもを比較してきたことや、集団に入ることが大切だと子どもに無理をさせてきたことなど、障がい児保育のなかで、今までの保育の問題が見えてきました。

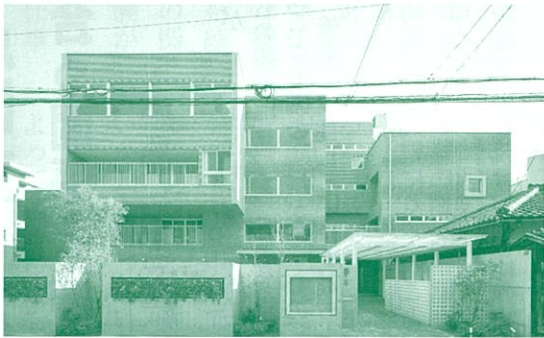
そこから、管理保育につながる一斉保育や設定保育の見直しになり、一人ひとりの子どもを大切に保育、自由保育、異年齢縦割り保育につながっていきました。これは今までの考えを180度転換することになり、現在に至っています。その後、障がい児の通園施設、障がい者の通

所施設と、障がい関係の仕事に取り組むなかで分かってきたことを子育て支援に生かしたいと保育園に戻りました。

再び問われる保育のあり方

ところで、園での保育時間は、元々は8時から16時が始まりでした。しかし次第に17時、18時と延長し、今では朝の7時から夜の7時半までの、12時間あまりを保育園で過ごす子どももいます。18時以降は家庭的な雰囲気のある別の場所でも過ごすなど、長時間保育のあり方に工夫がいるという課題が残ります。

保護者がスムーズに仕事をすることと、子どもが健やかに育つことの両立は難しく、矛盾を抱えています。そうした状況にあっても、どの子どもも「自分が大切にされている」と感じて生活できるように、園と家庭が共に協力しながら子どもを育ちを支えたいと考えています。



現在の保育園園舎

松村昌子：淡路こども園、風の子そだち園などで園長として長年障がい児者や家族と関わる。本人の意思や自尊感情を尊重するなど、本人主体の立場に立った支援を大切にしている。